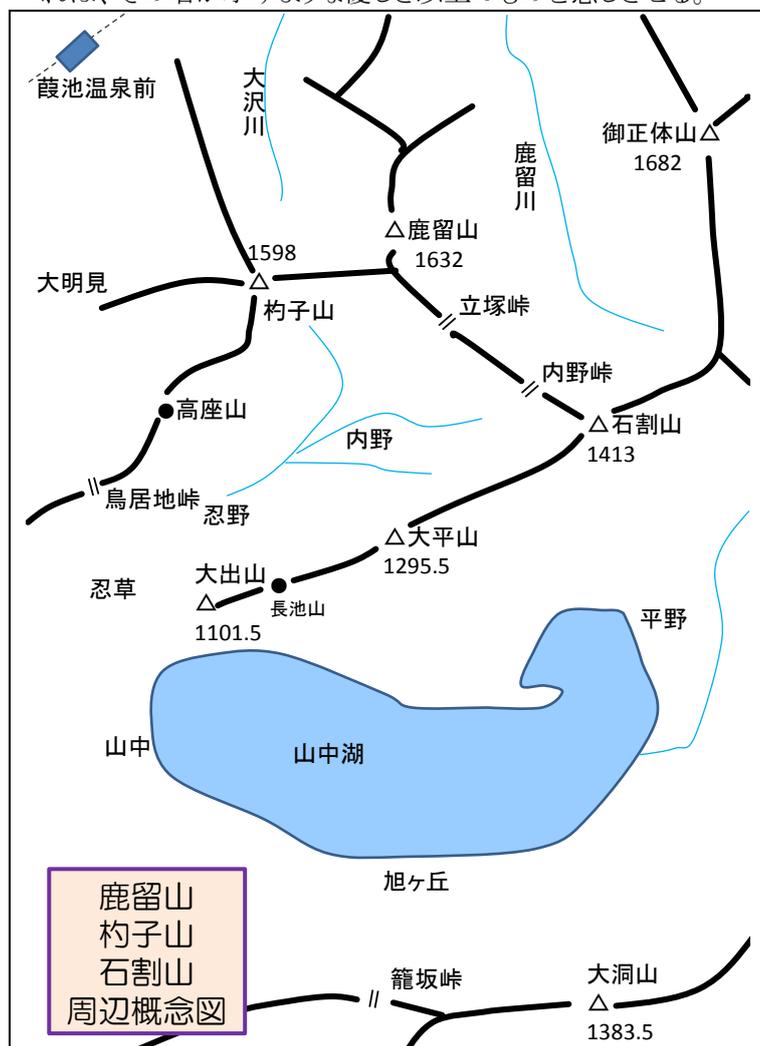


道志	鹿留山と杓子山	No. 129
----	---------	---------

「富士山を見るのにいい山」としていくつかの山をあげることがある。そんな時に必ずと言っていいぐらいに登場する山が、道志山塊の西南にある鹿留山(ししどめやま)であり、御坂山塊の東側にある三ツ峠山である。三ツ峠山は太宰治をはじめとする多くの著名な人物により広く知らされているのに対して、鹿留山は登山家たちの中でも数少ない人たちにしか愛されてはいない。知らない人さえいる。鹿留山 1632m、名前がいい。「しし」を「とどめる」山というから、名前を聞いただけで人の臭いを感じさせない。確かに西丹沢の山々と尾根続きになっているから、西丹沢の鹿の遠縁にあたる鹿でもいるに違いない。

昭和 44年 7月 12日
 新宿発 23 時 59 分、臨時電車の河口湖行。車内アナウンスによると下吉田には止まらないようなので、仕方なく富士吉田まで行き戻ることにする。

昭和 44年 7月 13日
 富士吉田着 3 時。バスターミナルのベンチでシュラフに入って仮眠。夏なればこそその野外の仮眠である。4 時 30 分起床、朝食(ニギリメシにインスタント味噌汁)をとって上り電車に乗る。空は重苦しい雲がのしかかるように張りつめ、期待できるような天気ではなさそうだ。下吉田駅を 5 時 30 分に出発。夜が明けたばかりの街並みを通り抜けて国道へ、国道を東へ離れて明見へ。明見(あすみ)という地名も何かを思わせる名である。「明るく見る富士」を指すのだろうか？ 湿った雲の厚い膜で富士は姿を見せてくれない。大明見を過ぎると、道は田圃の中を通り抜けて鳥居地峠へ向かって行く。このあたり月見草(マツヨイグサ)の群れが多く、いずれも拳を固めた程の花を着けており中には花の重さに耐えかねて首をうなだれたものさえある。太宰治は月見草を、「金剛力草とでもいいくなるような……」と書いている。確かに月見草もこのぐらい大きければ、その名が示すような優しさ以上のものを感じさせる。



小さな流れに沿った道は段々に狭くなり、高座山(たかざすやま)を右手に見ながら沢をつめて、海拔 1350m 付近で杓子山の稜線に到達。相変わらず雲一面で何も見えやしない。時折小さな風に吹き払われた雲の間に杓子山の緑の山肌が姿をのぞかせるばかり。ここで二回目の食事。あたりに景色が見えればこそこの休憩だが、何とも残念なことには富士山はおろか目の前の杓子も鹿留も見えやしない。さらに北へ標高差 250m ほどで杓子山。汗でカッとなった体に風を入れてふと振り返ると、頭上の雲の切れ間に富士の姿。首までを雲の中に隠し、思いもよらぬ高さのところに特徴ある吉田大沢の残雪。時折吹いてくる風と霧にフワッと消えてはフワッと出現する。杓子山から鹿留山のピストン。この間の稜線は、御坂道志の山々の特徴である深い灌木の藪と少々の針葉樹。半ばあきらめていた富士山が見られたせいか、下りは足取りも軽く歩もはかどる。鳥居地峠まで尾根をたどり、峠から今朝歩いた大明見へ。途中の小沢での小休止で口に含んだ水の旨さが、思いがけぬ富士の登場とともに良い土産となった。

以上